

御殿堰 大黒天便り



◆第八号◆

山形市中心市街地を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。



「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など「なるほど!」と思っていただけの内容をお伝えしていきたいと思っています。今回は第八号です。

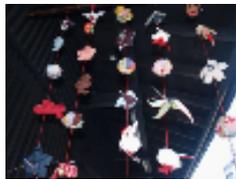
今回の『東日本大震災』により被害を受けた皆さまに、謹んでお見舞い申し上げます。皆さまのご無事と地震の沈静化、並びに一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

◆御殿堰一周年◆

昨年四月二十八日のオープン以来、たくさんのお客様に足をお運びいただきました。また、昨年十月二十五日には、第三回『地域づくりのやまがた景観賞』最高賞の知事賞に山形市の新名所「山形まるごと館紅の蔵」水の町屋七日町御殿堰が選ばれました。多くの方に感謝の一年となりました。誠にありがとうございます。

一周年を迎える四月には、皆さまに楽しんでいただけるようなイベントを企画しております。

御殿堰では、街中にいなからにして四季の移ろいを感じる事ができます。季節ごとに違った表情を魅せてくれる御殿堰に、皆さまに繰り返しお越しただけますよう。一同お待ちしております。



新店舗オープン

四月七日(木)、米沢織・米沢市の物産を展示販売するアンテナショップ『布四季庵』がオープン致しました。



米沢織協同組合連合会

米沢織の反物・和服・洋服服地の他、米沢牛・米沢鯉等を始めとする米沢の物産を取扱致します。米沢織を常設で展示・販売する店舗として第一号店となります。

店名の『布四季庵』は、上杉謙信の号である不識庵から取りました。皆さま、新しい発見をしに是非店舗へ足をお運びください。

いんねがつす

季節毎の「ほう?」「いんねがつす」なお話をさせていただきたいと思えます。様々なウンチク・四方山話をネタに日本文化・山形文化の素敵な所を皆さまで共有していきたいでしょう。

(こちらのコーナーでは御殿堰にて皆様をお待ちしている各店舗御主人にご協力いただき作成していきます)

『新茶 茶摘みの季節』

新茶とは、その年の最初に生育した新芽を摘み採ってつくったお茶のこと。鹿児島などの温暖な地域から摘み採りが始まり、桜前線と同様に徐々に北上していきます。

「新茶」は一年で最初に摘まれる「初物」の意味を含めて、また「旬」のものとして呼ばれる際などに使われます。茶樹は、冬の間に養分を蓄え、春の芽生えとともにその栄養分をたくさん含んだみずみずしい若葉を成長させます。それが新茶となるのです。立春(2月4日)から数えて八八日目の日を「八十八夜」といい、昔から、この日に摘み採られたお茶を飲むと、一年間無病息災で元気に過ごせると言い伝えられています。

是非、新茶の特徴『若葉の爽やかで清々しい香り』を楽しんで下さい。

『端午の節句』

端午の節句は、奈良時代から続く古い行事です。端午という日は、もとは月の始めの午(うし)の日という意味で、五月に限ったものではありませんでした。しかし、午(うし)の音が同じなので、毎月五日を指すようになったと伝えられます。

その頃の日本では季節の変わり目である端午の日に、病気や災厄をさけるための行事が行われていました。古く中国では、この日に菖蒲摘みをしたり、蘭を入れた湯を浴びたり、菖蒲を浸した酒を飲んだりという風習があったことから、日本の宮廷でも様々な行事が催されました。厄よけの菖蒲をかざり、皇族や臣下の人たちには蓬などの薬草を配り、また病気や災いをもたらすとされる悪鬼を退治する意味で、馬から弓を射る儀式も行われたようです。

宮廷で古来行われていた端午の行事も、時が鎌倉時代の武家政治へと移り変わってゆくに連れ、徐々に廃れてきました。しかし、武士の間では尚武しようぶ武をたつとぶの気風が強く、「菖蒲」と「尚武」をかけて、端午の節句を尚武の節日として盛んに祝うようになったと言われています。

江戸時代になると、五月五日は徳川幕府の重要な式日に定められ、大名や旗本が式服で江戸城に参り、將軍にお祝いを奉じるようになります。また、將軍に男の子が生まれると、表御殿の玄関前に馬印うまし(うまし)の幟を立てて祝いました。

このような時代の変遷のなかで、薬草を摘んで邪気を祓うという端午の行事が、男の子の誕生を祝いへ結びついていくと考えられ、武士だけでなく、広く一般の人々にまで広まっていきます。始めは、玄関前に幟や吹き流しを立てていたものが、厚紙で作った兜や人形、紙や布に書いた武者絵なども飾るようになり、江戸時代中期には、武者の幟に対抗して、町人の間では鯉のぼりが飾られるようになりました。

現在でも、端午の節句のお飾りは地方によって様々です。鯉や兜、武者人形、馬や虎・若武者の人形、鯉のぼりや旗のデザインもそれぞれの個性があります。

山形あれこれ ⑥ 植木市

薬師まつりの名物となった植木市。その由来については確かなことは不明ですが、山形城主の最上義光時代に大火があり、町内の緑樹が減ってしまったために緑化奨励として付近の農民達に呼びかけ開かせたのが始まりと伝えられています。

山形市の植木市は、熊本市・大坂市の植木市と並び日本三大植木市の一つと呼ばれています。出品される植木の数や種類も豊富で山形市内の山寺、楯山、鈴川地区を始め、新潟県や埼玉県など県内外より松、伽羅を始め数万点にのぼるさまざまな苗木類が寄せられています。期間は薬師まつりの行われる五月八日〜十日の三日間で、薬師堂を中心に薬師町通り、そして山形五中東通りなどを延べ約三キロの道路に植木屋がずらりと軒を並べ、鮮やかな新緑の植木や民芸品がお客を迎えています。

薬師祭の開かれる時期は、樹木に移植に良い時期であり、近代に入って山形市の発展と同時に交通の便も良くなったことから、植木市は次第に大きくなってきました。

祭には、毎年約五百店もの出店があり、三日間で約四〇万人の人手があります。歴史や規模の上でも東北最大です。植木市には植木屋のほかにも様々な出店が軒を並べ、県内外から来る見物客も所狭しと道路を埋め尽くし祭りを一層盛り上げています。

薬師祭は山形市の薬師町にある国分寺薬師堂の祭礼です。現在は新緑の頃の五月八日〜十日の三日間行われ、有名な植木市はもちろんなこと護摩祈禱や大般若転読会、花祭などがあわせて行われます。

一七六七年の『山形風流松の木枕』等の書物に植木市に関する記述があることから、少なくとも江戸時代には植木市が開かれています。

昔から山形には寺院が多く、「坪作り」という庭園を造る趣味も発達したので、その需要を充たすために古くから植木市が栄えてきたと言われています。

次号の発行は五月七日です。来月も皆様と紙面でお会いできるのを楽しみにしています。

御殿堰 七日町御殿堰開発株式会社